

街に感謝

高橋 寛

ご縁あって仙台暮らし16年。3月11日の晩は、それまで見たことがないほど星が近くてまばゆかった。街の灯りが突然消えたせいである。数日後、新聞販売所の号外で津波の写真に妻と釘付けになった。

学校が再開して5月からボランティアの生徒たちと募金のために街に立った。5月と6月。10月と11月。2月。街は殺気立った足早の人々の様子から季節とともに落ち着いた歩みへと移っていった気がする。どの時も、街は生徒たちに親切だった。私たちの募金は震災で親を亡くした子どもたちのために使ってもらいます、と声をからした訴えに、通る人たちは家族や親族の子に対するようにしてくれた。これをなめながらしなさいとアメをくれたりケーキを差し入れたり、喪章をしなさいと叱ったり、厳寒の2月にはあったかいお茶を差し入れる人がいた。

ふれあう人の中で心が育つ。いつの時にも生徒たちは、お金以上のたくさんのものを街でいただいた。疲れ果てて募金を終えた目が興奮で輝いていた。この活動は、続けなければならない。